

中国医薬学史年表

旧石器時代	約170万～69万年前	旧石器時代，原始人はすでに手製の石器を作っていた。約170万年前の「元謀人」（雲南），約80万年前～65万年前の「藍田人」（陝西），約69万年前の「北京人」（北京）の遺跡には火を用いていた痕跡が認められる。
	約20万～5万年前	この頃，燧人氏の「燧を鑽ちて火を取り，以って腥臊を化す」との伝説にあるように人類は人工的に火をおこすことを覚え，温罨法や灸法が生み出された。
	約1万8000年前	山頂洞人（北京），骨鍼を製作。骨鍼は縫製だけでなく破癰・排膿・瀉血に用いられた。
新石器時代（夏）	約1万年前～ 西暦紀元前2100年頃	新石器時代に入り，精巧な石器が製作されるようになり，それにあわせ最も古い医療道具である「砭石」が作られた。「神農，百草を嘗む」の伝説はこの頃のもの。
	紀元前2100～ 前1700年頃	夏代，酒は百薬の長として，すでに醸造が行われた。「昔者帝女儀狄をして酒を作らしめて美し，これを禹にすすむ」（『戦国策』）
商（殷）	紀元前1700～ 前1100年頃	商代，疾病という名称出現。灸・鍼・按摩術・薬物を用いた治療が行われるようになる。酒剤と湯剤が作られ，湯剤の創製は方剤の誕生を意味する。地下水道出現。
西周	紀元前1100頃～前771年	周代，医事管理制度・審査制度および医学の分科が整い専業の医師出現。多くの疾病が認識されるようになり，100種余りの薬物が使用されるようになる。『周礼』によれば疾病の診断に望診・問診・脈診が行われ，疾病治療に食物療法・薬物療法・手術が行われた。
東周	紀元前770～前476年	春秋時代，医学は巫術から離脱し，独立した科学としての体裁を整える。医爰・医和などの著名な医家が出現。医和が六氣致病説（病因学説の萌芽）を説く。『黄帝内経』成る。『行氣玉佩銘』出現。扁鵲，齊・趙・鄭・秦の諸国を遍歴し医療を行なう。
	紀元前475～前168年（戦国時代） 紀元前475～前168年（戦国～漢・文帝12年）	『足臂十一脈灸経』『陰陽十一脈灸経』『脈法』『陰陽脈死候』『五十二病方』『却穀食気』『導引図』『養生方』『雜療方』『胎産書』『十問』『合陰陽方』『雜禁方』『天下至道談』および『脈書』『引書』（発掘された帛書には表

			題がなかったが、研究者によって整理されるなかで、 各々の名称が付けられた) 成る。
秦	紀元前246～前217年(秦・ 王政元年～始皇30年)		秦律制定(法医学を内容に含む)。「癘遷所」が建てられ癩病人の隔離が行なわれた。
漢	紀元前210～前150年(秦・ 始皇32年～漢・前元 7年)		淳于意「診籍(カルテ)」創成。
	紀元前206～紀元76年 (漢・高祖元年～建初 元年)		『治病百方』成る。
	紀元前140～前87年(漢・ 建元元年～後元2年)		漢武帝、二度にわたり張騫 ^{ちやうけん} を西域に派遣。
	紀元前31～紀元220年 (漢・建始2年～建安 25年)		『神農本草經』成る。
	紀元前26年(漢・河平 3年)		侍医・李桂国、政府所蔵の医書(医經類7部・經方11部)を校勘整理。
	紀元25～210年(建武元 年～建安15年)		『難經』成る。
	89～105年(永元元年～ 17年)		郭玉曾、漢和帝の太医丞に任官される。
	97年(永元9年)		漢武帝、班超を西域に派遣。
	112～208年頃(永初6～ 建安13年)		華佗、民間で医療を行う。「麻沸散」を發明し腹部手術を行い、また「五禽戲」を創案。
	200～210年(建安5～ 15年)		張仲景『傷寒雜病論』著す。
三 国	220年頃(魏・黄初元年)		呉普『本草』, 李当之『本草』著す。
	239年(呉・赤烏2年)		呂広(呂博ともいう)『玉匱鍼經』を著し、『八十一難經』に注解を加える。
	256～282年(魏・甘露元 年～普太康3年)		皇甫謐 ^{こうほひつ} 『鍼灸甲乙經』著す。
晋	262年(景元3年)		嵇康没、生前『養生論』『答難養生論』を著す。
	266～282年(泰始2年～ 太康3年)		王叔和 ^{おうしゅくわ} 『脈經』著す。
	341年(咸康7年)		葛洪没、生前『肘後救卒方』『金匱藥方』『抱朴子』などを著す。

<p>晋</p>	<p>357年(昇平元年) 365年(興寧3年) 388年(太元13年) 392年(同17年) 399年(隆安3年) 409年(義熙5年)</p>	<p>于法開『議論備豫方』著す。 範汪没, 生前『範東陽方』を著す。 王珉没, 生前『療傷寒身驗方』を著す。 孔汪没, 生前『孔中郎雜藥方』を著す。 殷仲堪没, 生前『殷荊州要方』を著す。 崔浩『食經』を著す。</p>
<p>南 北 朝</p>	<p>420～479年(劉宋・永初元年～昇明3年) 422年(永初3年) 424～453年(嘉元元年～30年) 434～463年(嘉11年～大明7年) 442年(元嘉19年) 443年(元嘉20年) 454～473年(孝建元年～元徽元年) 458年(大明2年) 465年(永光元年) 465～467年(永光元年～南齊・建元4年) 465～482年(泰始元年～南齊・建元4年) 480～482年(建元2～4年) 499年(永元元年) 5世紀末 503年(梁・天監2年) 510年(北魏・永平3年)</p>	<p>雷敷『炮灸論』を著す。 宋武帝(劉裕)没, 生前『雜戎狄方』を著す。 「徐道度, 疾を療す」として, 錢塘が「天下五絶」の一人と絶賛する。 徐叔向『鍼灸要鈔』『療少小百病雜方』『談道術』『雜療方』『雜病方』『療脚弱雜方』『本草病源合藥要鈔』著す。 羊欣没, 生前『羊中散雜湯丸散酒方』『羊中散藥方』を著す。 宋(劉氏), 太医令・秦承祖, 医学を講じ『脈經』『偃側雜鍼灸經』『藥方』『本草』を著す。 陳延之『小品方』著す。 林邑国(ベトナム南東部)王・範坤が長史・範流を遣わし, 香などを贈る。王宏没, 生前『宋建平王典術』を著す。 支法存は『申蘇方』を著し, 脚弱の治療に長じていた。 徐文伯『療婦人瘕』『藥方』『弁傷寒』『傷寒総要』『弁脚弱方』著す。 劉休『食方』著す。 胡洽居士『百病方』著す。 褚澄没, 生前『医論』(後『褚氏遺書』と称される), 『雜藥方』を著す。龔慶宣『劉涓子鬼遺方』著す。北魂・李修, 東宮にて『藥方』を著す。 全元起, 『皇帝素問』を注解する。僧深『藥方』著す。 徐嗣伯『落年方』『藥方』『雜病方』著す。 中天竺・王屈多, 使節を遣わし, 瑠璃唾壺・雜香を贈る。 宣武帝(元恪)『医方精要』を勅撰する。</p>

南	514年	中国鍼灸, 朝鮮に伝えられる。王世榮『薬方』『单方』著す。	
	518年(梁・天監17年)	干陀利国(マレー半島とジャワ島の間にあった国), 雑香薬などを贈る。ペルシャ, 中国と通商を始める。薫陸香・鬱金・蘇木・青木香などが輸入される。	
	520年(普通元年)	インド僧・達摩, 広州へ来訪。その後, 嵩山・少林寺に移り, 按摩術「一指禪」を伝える。	
	522年(普通3年)	婆利国(現インドネシアのバリ島), 雑香薬など数十種の薬物を献ず。	
	529年(中大通元年)	盤盤国(マレー半島東北部にあった), 沈香・檀香・詹糖などの香薬を贈る。	
	531年(同3年)	丹丹国(マレー半島西岸の海中にあった島国), 香薬などを贈る。	
	北	536年(大同2年)	陶弘景没, 生前『本草経集注』『補闕肘後百一方』『名医別録』『養性延命録』などを著す。
		541年	医師を朝鮮に派遣。
	朝	549年(太清3年)	梁・武帝(蕭衍)没, 生前『所服雜薬方』『座右方』を著す。
		550年	灸治術, 日本に伝えられる。
551年(天正元年)		梁・簡文帝(蕭綱)没, 生前『如意方』『勸医文』を著す。	
552年		『鍼経』を日本・欽明天皇に贈呈。	
556年(西魏・恭帝3年)		この頃西魏の高僧・曇鸞によって『論気治療方』『療百病雜丸方』『調気方』が著される。	
562年		呉人・知聡『明堂図』など百六十巻を携え日本に赴く。	
572年(北齊・武平3年)		徐之才没, 生前『雷公薬対』『小児方』『徐王八世家伝効驗方』『徐氏家伝秘方』などを著す。	
575年(同6年)		李密『薬録], 陳山提『雜薬方』著す。	
580年(北周・大象2年)		姚僧垣『集驗方』著す。	
隋		581年(大定元年)	姚僧垣の次子・姚最『本草音義』著す。
	581~907年(隋・開皇元年~唐・天祐4年)	楊上善『黄帝内経太素』著す, 小児専科『顧頤経』なる。	
	610年(隋・大業6年)	巢元方ら『諸病源候論』著す。	
唐	621~731年頃(唐・武徳4年~先天2年)	孟詵『食療本草』著す。	
	624年(武徳7年)	唐・太医署唐都長安にて正式に設立。	
	641年(貞観15年)	文成公主, 医薬書籍などを携えチベットに嫁す。	
	652年(永徽3年)	孫思邈『備急千金要方』著す。	
	659年(顕慶4年)	蘇敬ら『新修本草』編纂する。	

唐	682年頃(永淳元年)	孫思邈 <small>そんしぱく</small> 『千金翼方』著す。
	710年(景竜4年)	金城公主医, 薬要員と書籍を携えチベットに嫁す。
	738年(開元26年)	陳藏器『本草拾遺』著す。
	752年(天寶11年)	王燾 <small>おうとう</small> 『外台秘要』著す。
	754年(同13年)	鑑真, 日本に到り中国医学(漢方医学)を講授す。
	762年(宝応元年)	王冰, 『素問』を注解し『補注黄帝内経』を著す。
五代	8世紀初頃	漢医・馬亞納と蔵(チベット)医・別魯扎納ら, 現存する最古のチベット医学書『月王薬診』を編纂する。
	同末	蔵医・宇妥・元丹貢布『四部医典』著す。蒙(モンゴル)医・哈日查德, 『脈診精要』『蒙医伝統専集』などを著す。
	841~846年(会昌元年~6年)	蘭道人 <small>らんどうじん</small> 『仙授理傷統断秘方』著す。
	847~859年(大中元年~13年)	咎殷 <small>きん</small> 『経效産宝』著す。
北 宋	927~960年(五代)	李昉 <small>りく</small> 『海薬本草』著す。
	934年(後唐)	陳士良『食性本草』著す。
	938~965年(後蜀)	韓保昇ら『蜀本草』著す。
	960~991年(宋・建隆元年~淳化2年)	宋朝, 太常寺に「太医署」を設立し医学教育を管掌させる。
	960~1081年(建隆元年~元豊4年)	宋朝, 「翰林医官院」を設立し医薬行政を担当させる。
	960~1127年(建隆元年~靖康2年)	宋朝, 「漏沢園」を設立し, 無縁ないし貧困者の死体を埋葬。
	960~1279年(建隆元年~祥興2年)	宋朝, 皇室専用薬局として「御薬院」を開設。また「尚薬局」を設立し薬事行政を管掌させる。
	961年(建隆2年)以後	占城国(ベトナム南部), いくども宋に遣いを送り, 犀角・象牙・竜腦・乳香・玳瑁・沈香・胡椒・丁香・豆蔻・茴香・箋香・檀香・木香・葶澄茄などの薬物を贈る。
	973年(開宝6年)	宋朝, 劉翰・馬志らに『開宝新詳定本草』を編纂させる。
	974年(開宝7年)	宋朝, 李昉 <small>りほう</small> ・王祐等に『開宝重定本草』を編纂させる。
宋		三佛齊国(インドネシアスマトラ島), たびたび宋に遣いを送り, 象牙・犀角・薫陸香・竜腦・乳香・胡椒などの薬物を贈る。
	975年(開宝8年)以後	交趾国(ベトナム北部), たびたび宋に遣いを送り犀角・象牙・珍珠・玳瑁・乳香などの薬物を贈る。

北	980～1037年（太平興国元年～景祐4年）	アラブ医学者アイセンナ『医典』編纂。
	982年（太平興国7年）	高麗国王，宋に遣いを出し，調度品と薬物を贈る。
	982～992年（太平興国3年～淳化3年）	宋朝，王懷隱らに『太平聖恵方』を編纂させる。
	985年（雍熙2年）	宋朝，『雍熙神医普救方』を編纂させる。
	987年（同4年）以後	サラセン帝国，たびたび宋に遣いを出し，白竜腦・薔薇水・象牙・琥珀などの薬物を贈る。
	992年（淳化3年）	宋朝，太医署を太医局と改称。閩婆国（スマトラ）がたびたび宋に遣いを出し，象牙・珍珠・檀香・玳瑁・竜腦・丁香藤などの薬物を贈る。
	998年（咸平元年）	日本僧・齋然，弟子を宋に遣わし，琥珀等の薬物を贈る。
	1001年（同4年）	宋朝，「病囚院」を設立し囚人に医療を施す。
	1002年（同5年）	宋朝，「安济坊」を設け，貧困患者を収容。
	1015年（大中祥符8年）以後	注輦国（インド東南部），2度にわたり宋に遣いを出し，象牙・乳香・竜腦・犀角・瓶香・薔薇水・金連水・木香・阿魏・丁香・珍珠などの薬物を贈る。
宋	1016年（大中祥符9年）	宋・真宗，高麗国に『太平聖恵方』を贈る。
	1026年（天聖4年）	王惟一『新鑄銅人腧穴鍼灸図経』著す。
	1027年（同5年）	王惟一，2体の鍼灸銅人を作成する。
	1041年（康定2年）	宋恵清，日本に赴き医療を行なう。同年，日本人・藤原清賢，眼治療法を求めて宋に入る。
	1041～1048年（慶暦年間）	呉簡・宋景『欧希範五臓図』著す（己佚）。
	1046年（慶暦6年）	何希彭『聖恵選方』著す。
	1057年（嘉祐2年）	宋朝，「校正医書局」を設立し，掌禹錫・林億らを責任者に任じて，歴代の重要な医籍の収集・整理・考証・校勘を行う。
	1057～1063年（嘉祐年間）	宋朝，「福田院」を設け，老人・病人・孤児寡婦などを収容。
	1061年（慶祐6年）	宋朝，蘇頌に『本草図経』を，掌禹錫・林億らに『嘉祐補注神農本草経』を編纂させる。
	1068～1077年（熙寧年間）	校正医書局，『素問』『傷寒論』『金匱要略』『金匱玉函経』『脈経』『難経』『鍼灸甲乙経』『千金要方』『千金翼方』『諸病源候論』『外台秘要』などを刊行。
1071年（熙寧4年）	高麗国より大量の薬材が贈られる。	
1075年（同7年）	編者不詳『蘇沈良方』成る。	

北 宋	1076年(同9年)	宋政府、首都・汴梁 <small>べんりょう</small> にて「売薬所」を設立、「熟薬所」とも称した。太医局、太常寺から分離し、独立した医学教育機構となる。
	1079～1154年(元豊2年～紹興24年)	許叔微『傷寒百証歌』『傷寒発微論』『傷寒九十論』『普濟本事方』など著す。
	1082年(元豊5年)	翰林医官院を医官局に改称。
	1082年頃	唐慎微『經史証類備急本草』(略称『証類本草』)著す。
	1085年(同8年)頃	陳直『養老奉親書』著す。
	1086年(元祐元年)	韓祇和『傷寒微旨論』著す。
	1092年(同7年)	高麗使者・黄宗憲、『黄帝鍼経』を宋にもたらす。以後宋政府はこの版本を翻刻し全国に配布。
	1093年(同8年)	董汲『小兒斑疹備急方論』『脚気治法総要』著す。
	1098年(元符元年)頃	楊子健『十産論』、龐安時『傷寒総病論』著す。
	1099年(同2年)	劉温舒『素問入式運氣論奥』著す。
	1102～1106年(崇寧年間)	楊介『存真図』著す。(散逸)。太医局が国子監に配属され、国家教育機構に編入される。
	1107年(大観元年)頃	朱肱 <small>しゆこう</small> 『傷寒類証活人書』著す。
	1107～1110年(大観年間)	宋政府、裴宗元・陳師文らに『和剂局方』を編成させる。
	1108年(大観2年)	宋政府、医官艾晟に『証類本草』の修訂を命じ、『大観經史証類備急本草』と改称。
金 南 宋	1111～1117年(政和年間)	宋政府の命により『聖濟総録』成る。
	1114年(政和4年)	売薬所を「医薬惠民局」と「医薬和剂局」に改称。宋政府、宮廷人員の治療のための「保寿粹和館」を設立。
	1116年(同6年)	宋政府、医官曹忠和らに再度『証類本草』の校訂を命ずる。『政和經史証類備用本草』成る。寇宗奭 <small>こうそうせき</small> 『本草衍義』著す。
	1119年(重和2年)	錢乙の弟子・閻孝忠、『小兒薬証直訣』を整理編纂。
	1125年(宣和7年)	王昶 <small>おうきょう</small> 『全生指迷方』著す。
	1127～1234年(金・天会5年～金・天興3年)	金政府、「太医院」を設立、医療行政と医学教育を管掌。
	1131年(宋・紹興元年)	郭稽中『産育宝慶集』著す。
	1131～1162年(紹興年間)	鄭克『折獄龜鑑』著す。
	1133年(紹興2年)	張銳『鷄峰普濟方』著す。
	1140年(同10年)	虞流『備産濟用方』著す。
1142年(金・皇統2年)頃	成無己『傷寒明理論』著す。	
1144年(同4年)	成無己『注解傷寒論』著す。	

金	南	1146年(宋・紹興16年)	寶材『扁鵲心書』著す。
		1148年(同18年)	宋, 売薬所を「太平惠民局」に改称。
		1150年(同20年)	劉昉『幼幼新書』著す。
		1151年(同21年)	宋政府, 『和剂局方』を許洪に校訂させ『太平惠民和剂局方』と改称, 発刊。
		1153年(金・天徳5年)	何若愚『流注指微賦』著す。
		1156年(宋・紹興26年)	『小兒衛生総微方論』(著者不詳) 刊行。
		1159年(同29年)	宋政府の命により医官王繼先ら, 『証類本草』を再び校訂増補し, 『紹興校定經史証類備急本草』を發刊。
		1162年(同32年)	錢聞礼『類証増注傷寒百問歌』著す。
		1165年(乾道元年)頃	王執中『鍼灸資生経』著す。
		1165年(乾道元年)	薛仲軒『坤元是保』著す。
	1170年(同6年)頃	『衛濟宝書』(原著者不詳, のちに東軒居士増注) 刊行。	
	1172年(金・大定12年)	劉完素『黄帝素問宣明論方』著す。	
	1174年(宋・淳熙元年)	宋政府, 『驗屍格目』を頒布。陳言『三因極一病証方論』著す。	
	1174~1189年(淳熙年間)	募捐興, 私立救済施設にて多くの貧窮患者を助ける。	
	1178年(淳熙5年)	楊俛『家藏方』著す。	
	1180年(同7年)	吳彦夔 ^{こげんき} 『伝信適用方』著す。	
	1181年(同8年)	郭雍『傷寒補亡論』著す。	
	1184年(同11年)	朱端章『衛生家宝産科備要』著す。	
	1186年(金・大定26年)	張元素『医学啓源』著す。『素問病機氣宜保命集』(著者不詳) 刊行。劉完素『素問玄機原病式』著す。	
	宋	1188年(宋・淳熙16年)頃	崔嘉言『脈訣』著す。
1196年(宋・慶元2年)		李迅『集驗背疽方』著す(散逸)。	
1208年(宋・嘉定元年)		桂万榮『棠陰比事』著す。	
1211年(同4年)		宋政府『檢驗正背人形図』を頒布。	
1220年(同13年)		齊仲甫『女科百問』著す。	
1224年(同17年)		張杲『医説』著す。	
1226年(宋・宝慶2年)		聞人耆年『備急灸法』著す。	
1228年(金・正大5年)		張從正『儒門事親』著す。	
1236年(宋・端平3年)		王好古『陰証略例』著す。	
1237年(宋・嘉熙元年)		陳自明『婦人大全良方』著す。	
元	1241年(宋・淳祐元年)頃	施發『察病指南』著す。	
	1241年(同年)	日本人・円爾弁円, 宋より数千巻の典籍を携え帰国。その中に中医書名30余部あり。劉開『脈訣』著す。	

明	1403～1408年(永楽1～6年)	明政府『永楽大典』を刊行，明代以前の多くの医書が収められる。
	1438年(正統3年)	熊宗立『勿聽子俗解八十一難経』著す。
	1442年(同7年)頃	冷謙『修齡要旨』著す。
	1443年(同8年)	明・太医院，『銅人腧穴鍼灸図経』を復刻，あわせて鍼灸鍼人も鑄造。
	1445年(同10年)	朝鮮・金礼蒙ら『医方類聚』を編纂。
	1476年(成化2年)頃	蘭茂 ^{てんなんほんそう} 『滇南本草』著す。
	1492年(弘治5年)	王綸『本草集要』著す。
	1501年(同14年)	張世賢『図注八十一難経』著す。
	1505年(同18年)	明政府『本草品匯精要』を組織的に編纂。この頃『難経集注』成る。
	1515年(正徳10年)	虞搏『医学正伝』著す。
	1529年(嘉靖8年)	高武『鍼灸聚英發揮』を著して刊行。薛己『内科摘要』『正体類要』『口歯類要』を著して刊行。
	1530年(同9年)	汪機『鍼灸問対』著す。
	1531年(同10年)	汪機『外科理例』著す。
	1549年(同28年)	王綸『明医雑著』を著して刊行。江瓘『名医類案』著す。
	1550年(同29年)	沈之問『解困元藪』著す。
	1554年(同33年)	薛己『瘍瘍機要』著す。
	1556年(同35年)	徐春甫『古今医統大全』著す。
	1564年(同43年)	李時珍『瀕湖脈学』著す。
	1565年(同44年)	楼英『医学綱目』，陳嘉謨『本草蒙筌』著す。
	1567～1572年(隆慶年間)	人痘接種術の記録。
	1568年(隆慶2年)	徐春甫ら順天府(北京)にて「一体堂宅仁医会」を組織。
	1571年(同5年)	薛己『外科枢要』著す。
	1572年(同6年)	李時珍『奇経八脈考』著す。
	1575年(万暦3年)	李梴『医学入門』著す。
	1578年(同6年)	李時珍『本草綱目』，周履靖『赤鳳髓』著す。
	1584年(同12年)	呉崑『医方考』著す。
	1586年(同14年)	馬蒔『黄帝内経素問靈枢注証発微』を著して刊行。
	1587年(同15年)	龔廷賢『万病回春』著す。
	1591年(同19年)	方有執『傷寒論条弁』，高濂『遵生八箋』著す。
	1601年(同29年)	楊繼洲『鍼灸大成』を著して刊行。
1602～1608年(万暦30～36年)	王肯堂『証治準繩』(『六科準繩』)著す。	

明	1604年(同32年)	龔雲林『小兒推拿秘旨』を著して刊行。
	1605年(同33年)	周于蕃『小兒推拿秘訣』著す。この頃、陳繼儒『養生膚語』著す。
	1611年(同39年)	朝鮮、許浚『東医宝鑑』著す。
	1615年(同43年)	龔廷賢『寿世保元』著す。
	1617年(同45年)	陳実功『外科正宗』著す。朝鮮医家、中国に来て、初の国際医学会開催。
	1620年(同48年)	武之望『済陰綱目』著す。
	1622年(天啓2年)	繆希雍『炮灸大法』著す。
	1624年(同4年)	張介賓『類経』、倪朱謨『本草匯言』を著して刊行。
	1625年(同5年)	繆希雍『本草経疏』を著して刊行。
	1632年(崇禎5年)	陳司成『霉瘡秘録』著す。
	1636年(同9年)	胡慎柔『慎柔五書』著す。
	1640年(同13年)	張介賓『景岳全書』を著して刊行。施沛『祖剂』著す。
	1641年(同14年)	秦景明『症因脈治』著す。
	1642年(同15年)	吳有性『温疫論』、李中梓『内経知要』著す。
	1644年(清・順治元年)	傅仁宇『審視瑤函』著す。
1648年(同5年)	喻昌『尚論篇』著す。	
1658年(同15年)	喻昌『医門法律』著す。	
清	1666年(康熙5年)	劉若金『本草述』著す。
	1667年(同6年)	張璐『傷寒續論』『傷寒緒論』著す。
	1669年(同8年)	柯琴『傷寒来蘇集』著す。
	1670年(同9年)	張志聡『黄帝内経素問靈枢集注』著す。
	1680年(同19年)	ラテン語による訳書『医鑑と中国脈理』がドイツ・フランクフルトにて出版される。
	1682年(同21年)	汪昂『医方集解』著す。
	1684年(同23年)	張令詔『傷寒論直解』、蕭壘『女科経論』著す。
	1686年(同25年)	汪昂『素問靈枢類纂約注』著す。
	1687年(同26年)	李用粹『証治匯補』、趙献可『医貫』著す。
	1688年(同27年)	王宏翰『医学原始』著す。
	1694年(同33年)	汪昂『本草備要』著す。
	1695年(同34年)	張璐『張氏医通』、夏鼎『幼科鉄鏡』著す。
	1697年(同36年)	王宏翰『古今医史』著す。
	1702年(同41年)	馮兆張『馮氏錦囊』、張志総『傷寒論集注』を著して刊行。
	1715年(同54年)	亟齋居士『達生篇』著す。
1722年(同61年)	戴天章『広瘟疫論』を著して刊行。	

清	1723年(雍正元年)	清朝, 勅令にて陳夢雷らに大型類書作成を命じ、『古今圖書集成』成る, 『医部全録』五百二十巻を含む。
	1729年(同7年)	尤在涇『金匱要略心典』著す。
	1732年(同10年)	程鐘齡『医学心悟』著す。
	1740年(乾隆5年)	王洪緒『外科証治全生集』著す。
	1742年(同7年)	吳謙ら『医宗金鑑』刊行。
	1746年(同11年)頃	葉桂『温熱論』『臨証指南医案』著す。
	1750年(同15年)	陳復正『幼幼集成』著す。
	1751年(同16年)	何夢艦『医編』, 吳儀洛『本草從新』著す。
	1754年(同19年)	薛雪『医経原旨』著す。
	1757年(同22年)	張宗良『喉科指掌』著す。
	1759年(同24年)	徐大椿『傷寒論類方』, 趙学敏『串雅内編』『串雅外編』刊行。
	1760年(同25年)	顧世澄『瘍医大全』著す。
	1761年(同26年)	吳儀洛『成方切用』, 嚴西亭ら『得配本草』著す。
	1765年(同30年)	趙学敏『本草綱目拾遺』著す。
	1770年(同35年)	魏之琇 ^{ぎししゅう} 『続名医類案』著す。
	1773年(同38年)	沈金鰲 ^{しんきんごう} 『幼科積謎』, 吳本立『女科切要』, 曹廷棟『老老恒言』著す。
	1772~1781年(同37~46年)	清政府, 総合叢書『四庫全書』を編集, このなかに歴代医書百余種を収録。
	1778年(同43年)	俞震『古今医案按』編纂。
	1784年(同49年)	楊瑢 ^{ようせん} 『寒温条弁』著す。
	1792~1801年(同57年~嘉慶6年)	唐大烈主編『吳医彙講』刊行。
	1794年(乾隆59年)	余霖『疫疹一得』著す。
	1796年(嘉慶元年)	吳坤安『傷寒指掌』著す。
	1798年(同3年)	吳鞠通『温病条弁』著す。
	1803年(同8年)	陳修園『平人延年要訣』著す。
	1804年(同9年)	陳修園『医学三字経』, 邱嘉『引痘略』著す。鄭梅澗『重楼玉鑰』刊行。
	1805年(同10年)	高秉鈞『瘍医心得集』著す。牛痘接種法伝来。
1810年(同15年)	尤怡『傷寒貫珠集』刊行。	
1801~1823年(嘉慶6年~道光3年)	陳修園『南雅堂医書』刊行。	
1817年(嘉慶22年)	真性コレラ, インドより入る。	

清	1822年(道光2年)	清朝政府, 太医院に鍼灸科を永久に廃止するよう下命。
	1825年(同5年)	章虚谷『医門棒喝』著す。
	1827年(同7年)	『傳青主女科』刊行。米人Collede.T.R, マカオに診療所を開設。
	1829年(同9年)	江涵暉『筆花医鏡』著す。
	1830年(同10年)	王清任『医林改錯』著す。
	1831年(同11年)	日本・丹波元胤『中国医籍考』著す。
	1833年(同13年)	兪理初『癸巳類稿』著す。
	1839年(同19年)	林則徐, 広東虎門にてアヘンを焼却。
	1840年(同20年)	江考卿『江氏傷科方書』著す。第一次アヘン戦争。
	1843年(同23年)	周松齡『小兒推拿輯要』著す。
	1844年(同24年)	顧觀光『神農本草経』を編集。不平等条約「望厦条約」により, 以後米国人は開港地に医学校, 病院, 教会を自由に開設できるようになる。
	1844~1848年(同24~28年)	英・米人によってマカオ・アモイ・寧波・上海・福州などに教会名義の病院や医学校が設立され, 帝国主義の橋頭堡となる。
	1846年(同26年)	鮑相璈『驗方新編』著す。
	1848年(同28年)	吳其浚『植物名実図考長編』『植物名実図考』著す。
	1850年(同30年)	合信『全体新論』, 呂震名『傷寒尋源』著す。
	1851~1864年(太平天国の時期)	太平天国, 病院・療養院を設け, 新しい公共医療制度を実施。アヘン・纏足・嬰兒の間引き, および娼妓を禁止。
	1851年(咸豊元年)	陳恭浦『傷寒論章句』著す。
	1852年(同2年)	王孟英『温熱経緯』『王氏医案』などを著す。
	1857年(同7年)	合信『西医略論』著す。
	1858年(同8年)	陸定圃『冷廬医話』著す。
	1859年(同9年)	John.Glasgow.Kerr, 広州に博濟病院を運営。
	1861年(同11年)	陳国篤『眼科六要』著す。
	1863年(同治2年)	費伯雄『医醇賸義』, 屠道和『本草彙纂』を著す。
1864年(同3年)	吳尚先『理諭駢文』著す。	
1865年(同4年)	費伯雄『医方論』著す。	
1866年(同5年)	John.Glasgow.Kerr, 広州にて博濟医学校を設立。陸九芝『世補齋医書』を著す。	
1873年(同12年)	港灣における検疫開始。	
1874年(同13年)	夏春農『疫喉浅論』, 廖潤鴻『鍼灸集成』著す。	
1875年(光緒元年)	陳定泰『医談伝真』著す。	

清	1877年(同3年)	潘霽『女科要略』著す。
	1882年(同8年)	雷豊『時病論』, 李紀方『自喉全生集』著す。
	1884年(同10年)	唐宗海『血証論』著す。
	1889年(同15年)	張振鋆『痧喉正義』『厘正按摩要術』著す。
	1892年(同18年)	朱沛文『華洋臟象約纂』, 馬培之『外科伝薪集』, 唐宗海『医経精義』著す。
	1885~1898年(同11~24年)	陳虬, 瑞安にて利济医院を創設, 学生を招集し中医学を講授。
	1894年(同20年)	余景和『外科医案彙編』著す。
	1897年(同23年)	陳葆善『自喉条弁』著す。
	1898年(同24年)	周学海『読医随筆』著す。
	1900年(同26年)	柳宝詒『温熱逢源』著す。
	1901年(同27年)	鄭肖岩『鼠疫約編』著す。
	1902年(同28年)	袁世凱, 天津に「北洋軍医学堂」を設立。1906年「陸軍軍医学堂」に改称。
	1903年(同29年)	京師大学堂に「医学実業館」を併設。1905年「医学館」, 1906年「京師専門医学院」へと改称, 中西医学を分習。
1904年(同30年)	「上海万国紅十字会」設立(1911年中国紅十字会と改名し, 1912年万国赤十字社に加盟)。	
1901~1911年(同17~宣統3年)	周学海『周氏医学叢書』刊行。	
1908年(光緒34年)	唐宗海, 『中西滙通医書五種』上海にて刊行。丁福保, 日本医書を翻訳。何廉臣ら『紹興医薬学报』を創刊。	
1910年(宣統2年)	東北にてペスト流行, 防疫所を設ける。丁福保, 「中西医学研究会」創立。	
中 華 民 国	1912年(民国元年)	余伯陶ら「上海神州医薬総会」創立。
	1912~1914年(民国元年~3年)	北洋政府, 中医の廃止を主張し, 全国の中医薬界の強い反対を受ける。北洋政府内務部は衛生司を設立し, 全国衛生行政機構を管理。
	1913年(同2年)	痘瘡流行。「解剖屍体規則」公布。
	1915年(同4年)	「中華医学会」成立し, 『中華医学雑誌』を出版。
	1917年(同6年)	余云岫『靈素商兌』(のちに拡充して『医学革命論』となる)
	1919年(同8年)	張山雷『体仁堂医薬叢刊』15種。
	1921年(同10年)	謝観主編『中国医学大辞典』, 1926年正式に刊行。
	1922年(同11年)	惲鉄樵『群経見智録』著す。
1909~1933年(清・宣)	張錫純『医学衷中参西録』(1918年7期30巻を出版)	

中 華 民 国	統元年～民国22年) 1924年(民国13年) 1925年(同14年) 1927年(同16年) 1928年(同17年) 1929年(同18年) 1930年(同19年) 1931年(同20年) 1932年(同21年) 1933年(同22年) 1935年(同24年) 1936年(同25年) 1937年(同26年) 1938年(同27年) 1939年(同28年) 1942年(同31年) 1948年(同37年)	惲鉄樵『傷寒論研究』著す。裘慶元『三三医書』を編纂。 北洋政府、医学教育に中医課程を編入することを拒否。 曹炳章『増訂偽薬条弁』、何廉臣『全国名医驗案類編』著す。 毛沢東『井崗山の闘争』のなかで、医療における「中西両法治療」を主張。 国民党政府衛生部、中央衛生委員会「旧医廃止案」を提出し、全国中医薬界の激しい反対にあい撤回。承淡安「中国鍼灸学研究社」創立。 国民党政府「医師条例」を頒布。于達望主編『中華薬典』出版。 「中央国医館」成立。承淡安『中国鍼灸治療学』著す。 趙燏黄 <small>ちやういつこう</small> 『新本草図志』、楊則民『内経之哲学的検討』著す。 張山雷『沈氏女科輯要箋正』、呉炳輝ら『鍼灸纂要』、阮其煜ら『本草経新注』著す。 紅軍、陝西省北部に到り、衛生行政機構を整備。延安中医院および各県医院を設立。謝観『中国医学源流論』、陳存仁ら編『中国薬学大辞典』、『中国薬物標本図影』出版。余云岫、中西医薬研究所設立。裘慶元『珍本医書集成』90種を編纂し出版。趙燏黄・徐伯璽『現代本草一生薬学』を編纂し出版。 国民党政府「中医条約」頒布。曹炳章『中国医学大成』、呉克潜『古今医方集成』、趙燏黄『沂州薬志』を出版。 曹穎甫『経方実験録』、陳邦賢『中国医学史』、蔡陸仙ら『中国医薬彙海』を刊行。 周禹錫『中国医薬約編十種』編纂。 裴鑑『中国薬用植物志』編纂。 李濤『医学史綱』出版。 于達理『国薬提要』出版。
	1949年10月	中華人民共和国成立。中央人民政府衛生部を設立。